

序文

2025年度全国調査報告書が完成いたしましたので、皆様にお届けいたします。

本報告書は、造血細胞移植件数、血縁ドナー登録件数および細胞治療件数の推移を取りまとめ、我が国の現状を一目で把握できる貴重な資料となっております。

本報告書の作成にあたり、臨床や研究にお忙しい中、多くのデータ登録にご協力いただいた医療機関の皆様、集積された膨大なデータを解析し、わかりやすくまとめていただいた日本造血細胞移植データセンター（JDCHCT）の皆様、さらに造血細胞移植登録一元管理プログラム（TRUMP®）を開発・運営されている皆様に、心より感謝申し上げます。

2024年の造血細胞移植件数（自家移植および同種移植を含む）は5,333件で、前年（2023年）より約450件減少しました。リンパ腫や形質細胞腫瘍に対する自家移植件数の減少が主な原因で、これらの疾患に対するCAR-T細胞療法や二重特異性抗体による治療が増えてきた影響が考えられます。移植後シクロホスファミド投与（PTCy）を血縁者間ハプロ移植のプラクティスで用いることができるようになり、血縁末梢血幹細胞移植件数はわずかに増加傾向です。骨髄バンクドナーからの非血縁者間移植においては末梢血幹細胞移植が増加傾向で33%を占めるようになってきました。欧米では非血縁者間末梢血幹細胞移植後のGVHD予防法としてPTCyが広く用いられるようになってきており、今後、本邦でも造血細胞移植や細胞療法の構造が年々さらに進化していくことが予想されます。我が国の造血細胞移植や細胞療法の現状をタイムリーにアップデートする本全国調査報告書は、患者や家族の意思決定においても、ますます重要な役割を果たすものと考えられます。

さらに、TRUMPに蓄積された膨大なデータはワーキンググループを中心とする若い研究者の皆様によって活発に研究活用され、多くの優れた成果が生み出され、造血細胞移植や細胞治療の発展に大きく寄与しており、その詳細はホームページで公開されています。

「ひとりでも多くの患者さんに完治を」目指すために、今後とも皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

2026年2月

第48回日本造血・免疫細胞療法学会総会会長
国立がん研究センター中央病院 造血幹細胞移植科
福田 隆浩